

May 3, 2026

平安・御霊の実

マルコ 6:48-51

6:48 イエスは、弟子たちが向かい風のために漕ぎあぐねているのを見て、夜明けが近づいたころ、湖の上を歩いて彼らのところへ行かれた。そばを通り過ぎるおつもりであった。

6:49 しかし、イエスが湖の上を歩いておられるのを見た弟子たちは、幽霊だと思い、叫び声をあげた。

6:50 みなイエスを見ておびえてしまったのである。そこで、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われた。

6:51 そして、彼らのいる舟に乗り込まれると、風はやんだ。弟子たちは心の中で非常に驚いた。

一、平安を奪うもの

5月24日のペンテコステを前に「御霊の実」について学んでいます。ガラテヤ 5:22-23 には「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」の9つの「実」があります。この9つはバラバラのものではなく、お互いにつながっています。黙示録 22:1-2 に「いのちの木」についてこう書かれています。「川は神と子羊の御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。こちら側にも、あちら側にも、十二の実をならせるいのちの木があって、毎月一つの実を結んでいた。その木の葉は諸国の民を癒やした。」ここには「十二の実」としか書かれていませんが、私はこれは「十二種類の実」のことではないかと考えています。天にある「いのちの木」には、1本の木に12種類の実がなり、月ごとにそれぞれが交代に実るので、木の実が途切れることがないと言っているのだと思います。神は植物を

「種類に従って」造られたので、しれぞれ違った実をならせる木は実際にはありませんが、ほんとうにそんな木があれば、1本植えるだけで様々な果物を収穫できるわけですから、便利なことこのうえないでしょう。「御霊の実」は、1本の木に9つの実が同時になるものとして描かれています。神は、一人の人格の中に「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」の9種類の実が同時に結ばれるようにしてくださいました。神は私たちを「まことのぶどうの木」であるイエス・キリストに結びついた「ぶどうの枝」とされましたが、その結ぶ実は1種類だけではなく、聖霊によって、9つもの実を結ぶようにしてくださったのです。

もし、そのような実が結ばれないとしたら、聖霊の働きを妨げている何かがあるのです。以前、趣味でぶどうを栽培している人に枯れたぶどうの枝を見せてもらったことがあります。虫の幼虫が枝に入り、そこから先が枯れてしまっていました。虫が入ったところが大きく膨らんでいましたが、そこにブドウスカシバという虫が入り込み、枝の内部を食い散らしていたのです。他にブドウトラカミキリやコウモリガなども同じように枝の内部に入り込み、枝を枯らしてしまうのだそうです。

きょうは、御霊の実のうち「平安」を取り上げるのですが、ぶどうの枝を枯らす害虫のように、私たちから平安を奪うものがあるのです。それを取り除かなければ平安の実を結ぶことができません。そんな害虫のようなものとは何でしょうか。

二、罪の赦し

それにはいくつかあるでしょうが、私たちから平安を奪う第一のものは、赦されていない罪です。イザヤ 57:21に「悪しき

者には平安がない。——私の神はそう仰せられる」とあります。1970年代の日本のことですが、大学生だった桐島聡は過激な左翼思想を持つようになり、1975年に連続企業爆破事件を起こしました。その容疑者として全国に指名手配されていたのですが、彼は、およそ50年もの間、神奈川県藤沢市の工務店で「内田洋」という偽名を使って、住み込みで働き、警察の目から逃れていました。しかし、2024年、彼は末期の胃がん入院したとき、突然、看護師に「自分は桐島聡だ」と本名を名乗り、警察に確保されました。そのとき彼は、「死ぬときくらいは本名で死にたい」と言ったそうです。事件から49年にも及ぶ逃亡生活が終わり、彼は自分の罪を認めることによって、穏やかに亡くなったということでした。

どんな罪も私たちから平安を奪います。「罪」はぶどうの枝の根本に入り込んでそこを食いつぶす害虫のようなものです。ぶどうの木であるイエスとの結びつきを切り離し、神からの命を妨げます。しかも、この「罪」という害虫を私たちは自分の力で取り除くことができないのです。それができるのはイエスだけです。「悪しき者には平安がない。」私たちは、自分ではその自覚がなかったとしても、神を信じないで自分勝手に生きてきた「悪しき者」の一人でした。しかし、イエスは「悪しき者」が神に立ち返り、「正しい者」として神に受け入れられる道を開いてくださいました。ローマ4:24-5:1にこうあります。聖書にはもともと章節の区切りはありませんでしたので、この箇所は章をまたいで読むともっとよく分かります。「すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、義と認められるのです。主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、

よみがえられました。こうして、私たちは信仰によって義と認められたので、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」ほんとうは私たちのほうから罪の償いをして神との和解を求めなければならないのに、それができない私たちに代わって、イエスは十字架の死で償いを成し遂げ、私たちを救うために復活されました。それによって神との和解を与えてくださいました。それが「神との平和」です。御霊の実としての平安はこの「神との平和」から来るのです。罪を悔い改め、イエスを信じる者は罪を赦されます。罪からきよめられ、罪によって傷ついたものが癒やされていくのを体験します。「平安」の実は、この赦しときよめ、また癒やしのうちに結ばれていくのです。

三、イエスへの信仰

私たちから平安を奪うもの、それは第二に「不信仰」です。きょうの箇所の子供たちの姿はそれを表わしています。イエスのご自分のあとを追ってきた群衆が空腹なのを気の毒に思い、たった5つのパンと2匹の干し魚を何百倍にも増やし、大勢の人々にパンを与えられました。「五千人の給食」や「パンの奇跡」と呼ばれるものですが、それは、「いのちのパン」であるイエスが私たちを生かし養うために、十字架でご自分のからだを裂かれることを示す「しるし」でした。こののちイエスは弟子たちだけを舟に乗せて向こう岸に向かわせ、群衆を解散させてから、一人で祈るため山に登られました。

弟子たちの多くはガリラヤ湖の漁師たちでしたから舟を操るのはお手のものでした。ところが、向かい風に妨げられ、向こう岸がほんの少しのところに見えているのに舟は少しも進みま

せんでした。山の上からその様子をご覧になったイエスは、なんと、舟に乗ってではなく、ご自分の足で水の上を歩いて弟子たちの舟に近づき、それを追い越そうとされました。マルコ 6:48に「そばを通り過ぎるおつもりであった」とありますが、それはイエスが弟子を放っておいて、ご自分だけが先に向こう岸に着くためではありません。弟子たちの舟を追い越そうとされたのは、舟の先頭に立ち、風をさえぎり、舟を前に進ませるためでした。また、イエスが向かい風で波立つ湖の上を歩かれたのは、イエスが創造者であり、また、私たちの人生の導き手であることを示すものでした。ヨブ記 9:8に「神はただひとりで天を延べ広げ、海の大波を踏みつけられる」とあります。イエスはこの言葉のとおりのことをなさって、弟子たちにご自分がどのようなお方なのかを示されたのです。

ところが弟子たちは、イエスを見て「幽霊だ！」と言って叫び声をあげました。イエスの最も身近にいた弟子たちが、そこにおられるのが自分たちの師であることが分からなくなるほど、彼らは恐怖にとりつかれていたのです。「平安」の反対は「恐怖」です。このときの弟子たちは平安をまったく失っていました。なぜでしょう。イエスへの信頼に欠けていたから、つまり不信仰だったからです。51節の最後に「弟子たちは心の中で非常に驚いた」とあります。この驚きは不信仰の驚きです。弟子たちはイエスの数々の奇跡を見てきました。イエスが水の上を歩かれる奇跡の直前には「パンの奇跡」を体験したばかりでした。弟子たちはイエスの手から直接パンを受け取り、人々に配ったのですから、その奇跡を見たというより、イエスとともに奇跡を行ったのです。それなのに、イエスが水の上を歩き、風を鎮められたからといって驚いているのは、イエスが神

の子キリストであると頭では分かっている、いざとなると、イエスを主として信頼することができなかったからでした。

しかし、そんな不信仰な弟子にもイエスは優しく声をかけられました。「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」弟子たちはその不信仰を責められても当然でした。しかし、イエスは弟子たちを励まし、「わたしだ」と言われました。これはギリシャ語で「エゴー・エイミー」(IAM)という言葉です。イエスはこの言葉を使って、「わたしはいのちのパンです」(ヨハネ 6:48)、「わたしは、世の光です」(同 8:12)、「わたしは門です」(同 10:9)、「わたしは良い牧者です」(同 10:14)、「わたしは、よみがえりです。いのちです」(同 11:25)、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」(同 14:6)、そして、「わたしはまことのぶどうの木です」(同 15:1)と言っておられます。つまり、イエスは私たちにとって必要なお方、なくてはならないお方、すべてのすべてであるということです。「エゴー・エイミー」(IAM)には「わたしは存在する」という意味もありますから、イエスはここで、ご自分が実体のない幽霊などではないし、この世に生まれては世から去っていく人間の一人でもない、昔も今も、そして後の世にも変わらず存在される神であると言っておられるのです。

湖はこの世です。舟は私たちの人生です。この世を旅する私たちは、いつも順風満帆というわけにはいきません。風や波に出会います。もし、そのたびに恐れ、おびえていたら、決して先には進めず、目的地に着くことはできません。恐れ、おびえるというまでもなく、いたずらに心配したり、いつも思い煩っていても、真っ直ぐには進めず、同じところを堂々巡りしてし

まいます。心配が思い煩いになり、思い煩いが恐れになる前に、イエスがともにおられることを覚えましょう。51節に「そして、彼らのいる舟に乗り込まれると、風はやんだ」とあるように、イエスを人生に迎え入れるなら、たとえどんな困難の嵐の中にあっても、私たちはイエスにある神の平安で満たされます。そして、困難の嵐もやがて静まるのです。詩篇にこうあります。「この苦しみのときに 彼らが主に向かって叫ぶと／主は彼らを苦悩から導き出された。主が嵐を鎮められると／波は穏やかになった。波が凪いだので彼らは喜んだ。／主は彼らをその望む港に導かれた。」（詩篇 107:28-30）

神は、「罪」に対しては「悔い改め」を、「不信仰」に対しては「信仰」を備えてくださいました。「悔い改め」と「信仰」を右足、左足のようにして、天への歩みを続けましょう。悔い改めてはイエスの恵みに信頼し、イエスに信頼するからこそ悔い改めて進むのです。そのとき、「平安」が御霊の実として私たちのうちに結ばれていくのです。

（祈り）

父なる神さま、私たちが平安の実を結ぶのに妨げとなるものに気付かせてください。思い煩いや恐れを持つとき、あなたの励ましによって信頼を回復できるようにしてください。私たちをあなたの平安で満たし、その平安によって、私たちの家庭や職場、また、関わりを持つ人々に、あなたの平安を届けることができるよう助けてください。「わたしの平安を与える」と約束されたイエス・キリストのお名前です。